	テーマ	主な内容
1	キリシタン史概要と前史	1549 年以前のキリスト教の影響を含め、キリシタン史全体を概観します。
2	ヤジロウとザビエルの来日	ザビエルが、マラッカでヤジロウと出会い日本宣教を志した経緯と２年強に亘る日本伝道の足どりを追います。
3	高山右近ら キリシタン大名	キリシタン大名が果たした功罪と、その中でも、特に影響の大きかった高山右近について学びます。
4	巡察師ヴァリヤーノと適応主義	日本に宣教に来たザビエルとその後継者コスメデトルレス神父や巡察師ヴァリヤーノが採った「適応主義」について学びます。
5	イエズス会の教育と信徒組織	未だ「日本語聖書」が無い時代に、どのように伝道し、教育をして行ったのかを学びます。
6	秀吉の伴天連追放令と迫害	秀吉の九州平定以後、突如、宣教師追放が告げられます。いったい、どんな理由があったのかを学びます。
7	鎖国と徳川幕府による禁教	キリシタンに対する組織的で徹底的な弾圧と、外国との交流を長崎の出島に限る鎖国政策に至った経緯を学びます。
8	潜伏キリシタンと高札撤去	九州長崎の一部や五島列島で、自分たちの信仰を隠しながら守り続けてきた「潜伏キリシタン」について学びます。

キリシタン時代90年➡鎖国215年間
➡プロテスタント宣教165年

キリシタン伝道発展の時代　禁教と潜伏の時代　プロテスタント宣教

前史

戦国時代・織田信長

豊臣秀吉

潜伏キリシタン

江戸時代・徳川幕府260年

鎖国215年

明治

大正

昭和

一五四九年　ザビエル来日

一五六四年　高山右近受洗

一五八二年　本能寺の変

一五八七年　バテレン追放令

一五九二年　豊臣秀吉　太閤となる

一六〇〇年関ケ原の戦い

一六〇三年　徳川家康　江戸幕府

一六一二年　キリスト教禁令

一六三七年　島原の乱

一六三九年　ポルトガル船入港禁止

長崎の出島

オランダと中国のみ外交

一八五四年　日米和親条約

一八六五年　長崎大浦天主堂献堂

一八七一年　岩倉使節団

一八七三年　禁令の高札撤去

一八八九年　大日本帝国憲法

一九四五年　日本国憲法制定

90年

伝道進展38年間

迫害52年間

215年

鎖国　禁教

165年

プロテスタント宣教

マードレ・デ・デウス号事件（1610年）

1609年　有馬晴信の朱印船がポルトガル領マカオにおいて、ポルトガル船マードレ・デ・デウス号の船員と取引をめぐり、騒擾事件を起こし、これをマカオ総司令アンドレ・ペソアが鎮圧し、晴信側の水夫に60名ほどの死者が出た。

1610年　晴信は、仕返しに、長崎にいたマードレ・デ・デウス号を、長崎奉行の長谷川 藤広の支援を受けて、攻撃し、4日4晩の戦闘の末に船は炎上し、ペソアは火薬庫に火を放ち自沈した。

この事件により、ポルトガル船の長崎来航が2年間中断し、それまで家康の信任が厚かった通詞のジョアン・ロドリゲス神父が、マカオに追放され、代わって、イギリス人のウィリアム・アダムスが重用されることになり、イエズス会とキリシタン界は、幕府に対する有力な窓口を失った。

岡本大八事件（1611～1612年）

有馬晴信と長崎奉行藤広の対立が深まり、そこに、デウス号事件の（幕府の）目付け役として派遣されていた岡本大八が、このデウス号事件の際の恩賞を徳川家康に斡旋すると偽って多額の賄賂を晴信から受け取った。しかし、いつまでたっても恩賞の沙汰が無かったので、晴信が岡本大八の上司である本多正純と直談判し、詐欺行為が発覚した。大八は、安倍川の河原で火あぶりの刑に処された。

岡本大八事件が起きたそもそもの要因はキリスト教への寛容さに問題があったためと考え、幕府は貿易の実利よりも弊害を問題視した。幕府は公的に幕府直轄地に対してキリスト教の禁教令を発布して大名に棄教を迫った。

1612年　幕府直轄領にキリシタン禁教令
1613年　全国にキリシタン禁教令

ショアン原 主水
胤信（たねのぶ）

高輪カトリック教会

原主水は、その後も布教活動を続け、江戸・浅草のハンセン病患者の家を拠点とするが、後に密告によって捕らえられ、1623年に宣教師ら47名とともに江戸市中引回しの上、高輪の札の辻にて火刑に処された。死の直前に「私がここまで苦難に耐えてきたのは、キリストの真理を証明するためであり、私の切られた手足がその証である」と述べたと伝えられている。

有馬晴信の息子、直純は、禁教令に従って棄教し、有馬の地は天領とされた。9月には高山右近をはじめ、修道会士や宣教師など主たるキリスト教徒が、マカオやマニラに国外追放された。

1613年　キリシタン禁令の高札

定

きりしたん宗門ハ累年御禁制たり
自然不審成ものこれあらハ申出へし
御ほうひとして

はてれんの訴人　銀五百枚
いるまんの訴人　銀三百枚
立かへり者の訴人　同　断
同宿并宗門の訴人　銀百枚

右の通下さるへし　たとひ同宿宗門の内
たりといふとも申出る品により銀五百枚
下さるへし　かくし置他所よりあらハるゝに
おゐてハ其所の名主并五人組迄一類ともに
可被行罪科者也

正徳元年五月日

奉行

バテレン（宣教師）銀500枚、およそ350両　3500万円
イルマン（修道士）銀300枚
立ちかえりの者（再びキリスト教の信者となったもの）
同宿并宗門（伝道師と信徒）銀100枚

隠し立てすれば名主をはじめ、五人組まで罰することが記されている。

1620年　平山常陳事件

マニラを出航して日本に向かっていた平山常陳の朱印船がイギリス・オランダの船隊によって拿捕された。船には、アウグスティノ会の宣教師ペドロ・デ・スニガ、ドミニコ会の宣教師ルイス・フロレスの2人が、スペイン商人として乗船していた。本来、朱印船の積荷を奪うことは許されない行為であったが、イギリスおよびオランダ側は「日本入国を禁じられている宣教師を乗船させていた」ことを理由に、積荷の没収の正当性を訴えた。一方、平山常陳はこれを「海賊行為」であるとして長崎奉行に訴えた為、調査が行われた。

本事件はスペイン・ポルトガルとイギリス・オランダ両陣営の日本での主権争いの様相を呈したものになった。調査の結果、スニガ、フロレス2人の宣教師も自白に至り、1622年8月19日、長崎で平山常陳、スニガ、フローレスの3名が火あぶりになり、船員12名が斬首となった。

1622年9月
元和の大殉教
（長崎・西坂）

平山常陳事件は、幕府のキリシタンに対する不信感を決定づけるものとなった。長崎の西坂でカトリックのキリスト教徒55名が火刑と斬首によって処刑された。日本のキリシタン迫害の歴史の中でも最も多くの信徒が同時に処刑された。この事件後、江戸幕府による弾圧はさらに強化されて行った。

1637年　島原の乱

島原藩主の松倉勝家が領民の生活が成り立たないほどの過酷な年貢の取り立てを行い、年貢を納められない農民、改宗を拒んだキリシタンに対し熾烈な拷問・処刑を行ったことに対する反発から発生した、江戸時代の大規模な反乱。

反乱の原因が、年貢の取りすぎにあったが、松倉勝家は失政を認めず、反乱勢がキリスト教を結束の核としていたことをもって、この反乱をキリシタンの暴動と主張した。

幕府は島原の乱の後、キリシタンを根絶やしにするため、全力をそそぐことになった。

島原の乱

北部の赤は領主側の村
中央の黄色は一揆に一部参加の村
南部の緑は全員参加の村

通称「天草四郎陣中旗」

中央に大聖杯、その上に聖体聖餅（せいたいせいへい）、左右に合掌している天使が描かれている。我が国の初期洋画家である山田右衛門作（やまだえもさく）が原城内で描いたもの、あるいは禁教令以前のセミナリオで聖旗として描いたものとも言われる。

天草 四郎時貞

天草の大矢野村の出身といわれる。熊本や長崎で学問を修めていた人物。武士の風格を持った知識人とされる。島原・天草の乱で首領となるほど、カリスマ性をもっていた。乱が鎮圧されると、四郎の首は、長崎の出島に馴された。

10代半ばの若者で、小西行長の旧臣や、キリシタンたちから「救世主」と崇められていた。

「経済一揆」か「宗教一揆」か

幕府軍の責任者、松平伊豆守から、矢文が原城内に放たれた。「この一揆の意図は、幕府に恨みがあるのか、領主に恨みがあるのか」

『現世のことについては、我々は『天下様』(将軍)に背くつもりはありません。もし謀反人などが出た場合には、討伐軍の一手はキリシタンにお任せ下さい。一命を軽んじてご奉公申し上げることを『天主』(デウス)に誓います。しかし『後生の一大事』については、天使様のご命令を守ります』

キリシタン時代90年➡鎖国215年間
➡プロテスタント宣教165年

キリシタン伝道発展の時代　禁教と潜伏の時代　プロテスタント宣教

前史

戦国時代・織田信長　豊臣秀吉　江戸時代・徳川幕府260年　明治　大正　昭和

潜伏キリシタン

鎖国215年

一五四九年　ザビエル来日

一五六四年　高山右近受洗

一五八二年　本能寺の変

一五八七年　バテレン追放令

一五九二年　豊臣秀吉　太閤となる

一六〇〇年関ケ原の戦い

一六〇三年　徳川家康　江戸幕府

一六一二年　キリスト教禁令

一六三七年　島原の乱

一六三九年　ポルトガル船入港禁止

長崎の出島

オランダと中国のみ外交

一八五四年　日米和親条約

一八六五年　長崎大浦天主堂献堂

一八七一年　岩倉使節団

一八七三年　禁令の高札撤去

一八八九年　大日本帝国憲法

一九四五年　日本国憲法制定

90年

伝道進展38年間　迫害52年間

215年

鎖国　禁教

165年

プロテスタント宣教

井上筑後守政重（いのうえちくごのかみまさしげ）

　徳川家光の下で大目付となり島原の乱を鎮圧した。1640年、**最初の宗門改役**となり、キリスト教禁圧の総元締めとなった。彼のキリシタン弾圧のやり方は、非常に狡猾で、恐ろしいものであった。

「穴吊り」➡汚物を入れた穴の中に、体を縛って逆さに吊るす。血が頭に逆流して、その苦痛は最初は緩やかに、徐々に度を増し、最後は言語に絶するものとなる。

「水磔」（すいたく）➡海岸の波打ち際に木柱を立てて信者たちを縛り付けておくもので、満潮になると海水が顎のあたりまで達する。囚人はすぐには絶命せず、数日かけて肉体も心も疲れ果てた末、息を引きとる。

1627年～32年　雲仙地獄責め

信徒らは煮え返る池の岸で棄教するよう説き勧められる。拒否した者は服を脱がされ、両手両足を縄でくくりつけられ、ひしゃくで熱湯を浴びせられた。

1669年発行のモンタヌス「日本誌」にその絵が記載され、その凄惨さは、ヨーロッパの人々に大きな衝撃を与えた。

クリストヴァン・フェレイラの棄教
（遠藤周作『沈黙』のモデルとなった人物）

1609年、すでにキリスト教の布教が困難を極めていた時期に、日本にやってきたイエズス会宣教師。日本語にすぐれ、禁教令後の苦難の時代にあっても国内に潜伏して信者を励ましつづけ「天使のごとき神父」と称賛された。日本のイエズス会の中心となって働いていたが、日本管区の管区長代理を務めていた1633年に長崎で捕縛された。

他の6名は数日間の苦しみに耐え殉教した。中浦ジュリアン神父は、かつての遣欧少年使節のひとりであった。

1633年10月18日、フェレイラは7人の仲間とともに長崎の西坂で逆さ吊りにされた。身体に布を巻き付け、その上から何重にも縄で縛るため、内蔵は動かず、すぐには死なない。ただ、血流が頭に充溢し意識を失う。このため、こめかみに穴をあけ、血流滴らせる。穴へ落としたり、引きあげては「転ぶか？」と尋ねる。

フェレイラは、5時間後、混乱した意識の中で「転び証文」にサインし棄教した。後に日本人妻を娶って、沢野忠庵と名乗った。幕府の切支丹取り締まりに協力し「踏み絵」を考案したと言われる。

マルチリヨ（ポルトガル語で「殉教」を意味する）を教える「キリシタン版」（活版印刷された本）

1591年『**サントスの御作業の内抜書**』

様々な聖人の伝記であるが、主に殉教した聖人のものが多かった。付録のような形で、直接殉教の意義を論じた「マルチリヨの証拠」という項目がある。

1592年『**ヒイデスの導師**』（信仰の手引き）

殉教に関する章が含まれている。

1596年『**こんてむつす・むんぢ**』

『イミタティオ・クリスティ』すなわち「キリストに倣いて」が原書で、イエス・キリストの生き方に学び、倣い生きることを論じた本である。当然、殉教の精神にも多く触れている。

1607年『**スピリツアル修行**』

「御パッションの観念」も殉教の精神。

聖パウロ三木

ここにおいでになる全ての人々よ、私の言うことをお聴き下さい。私はルソンの者ではなく、れっきとして日本人であってイエズス会のイルマンである。私は何の罪も犯さなかったが、ただ我が主イエス・キリストの教えを説いたから死ぬのである。私はこの理由で死ぬことを喜び、これは神が私に授け給うた大いなる御恵 だと思う。今、この時を前にして貴方達を欺こうとは思わないので、人間の救いのためにキリシタンの道以外に他はないと断言し、説明する。キリシタンの教え が敵及び自分に害を加えた人々を赦すように教えている故、私は国王(秀吉)とこの私の死刑に拘わった全ての人々を赦す。王に対して憎しみはなく、むしろ彼 と全ての日本人がキリスト信者になることを切望する。

(フ ロイス、『殉教記録』145頁)

マタイ5:10～12

義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。